

みんなでつくる「人権の新しい時代」

同和地区出身の記者として

ある新聞の特集企画に、「人権新時代」という記事があります。その中の一つに、同和地区に生まれた28歳の記者が実名で書いた記事がありました。

8回にわたる連載記事の中には、同和地区に生まれたことを意識した小学生時代から、差別的な発言を見聞きするたびに、焦りや恐怖を感じ続けていたことが書かれています。

また、家族や友人、小学生の頃に参加していた学習会の指導者や差別と闘う活動をしている方へのインタビューを行っていく中で、「記者として自分に果たすべき役割があるのではないか」という考えをもつようになっていったことが丁寧に書かれています。

心に残ったこと

この連載記事を読んで、私の心の中に一番強く残ったものが、記者と母親のやりとりの部分でした。

記者が自分のルーツを明かして記事を書くことを伝えると、母親は複雑な心境を次のように語ります。

「書くことで差別のターゲットになるのではないかという

す。空欄が埋まったのは前日の夕方、悩める時間をいっぱいに使って書き上げたつもりです。

キーワードは「みんな」です。部落問題以外にも、生きづらさを感じている人はすぐそばにいます。もしかすると自分の大切な人なのかもしれません。人権問題という言葉だけを聞くと堅苦しくも思える問題はみんな考えて、取り組んでいくべきなのでしょう。

「新しい時代」という高いハードルを読者に求めてしまいました。きれいなことを書いたつもりもありません。誰にも言えない生きづらさをくみ取り、胸の奥に押し込んだ切実な願いに応えられる能力が人間には備わっているはずですよ。

私がすることはこれからも変わりません。応えてくれる読者がいる限り、さまざまな人権問題を伝えていきます。

わたしたちができること

差別は私たちの身近にあります。だからこそ、相手の立場や気持ちを考えたり、自分のこととして考えたりすることが大切であることを私は今回の経験を通して気づくことができました。同じように新聞の特集を読んだ同僚も、さまざまなことを考えていました。

不安がある。差別と向き合い、問題を伝える大切さは分かるが、自分には人前で差別がいけないと言うことはできない。子どもには差別と関係ない場所で平穏な暮らしをしてほしい」

この言葉の背景には、母親自身が今まで味わってきたつらい差別体験があると思います。

本心では「差別をなくしたい」と考えているにもかかわらず、差別の厳しさを知っているが故に「そっとしておいてほしい」と言わせるものが、差別の根深さだと思っています。

お互いを大事に思いあう親子のつながりを切ってしまう部落差別を、私は絶対になくさなければならぬと強く思いました。

記者からの手紙

そんな私の思いを手紙に書き、新聞社に送ったところ、後日、次のような返信が記者の方から届きました。

連載第1回の紙面が読者に届けられた日、母とのやりとりを書いた原稿は締め切りの10行が空欄のままでした。同和地区に生まれた記者として、記事を通じてどんなメッセージを伝えるべきか、悩んでいたからで

当事者の生の声が包み隠さず語られていて、貴重なことを知ることができたね。

「寝た子を起こすな」的な考えでは、同和問題の解決にはならないよね。

無知では何も変わらないから、正しいことを知る機会が必要と感じたよ。



自分ひとりではなく、みんなで考えることで、お互いがこの社会の中でどのような立場にあるかを考えさせられたと思います。

当事者が勇気を出して声を上げたり、本心ではない言葉を使ったりする必要のない社会をつくっていくために、私は今回の新聞記事から学び、感じたことを、周りの人たちに伝えていきたいと考えています。

ありのままを認め合うことのできる人権の新しい時代……。

そんな時代をつくっていくのは他の誰でもない、わたしたちみんななのだから。